



復刊第60号
題字 吉岡弥生

ブラジル会議の教えるもの

会長 三神美和

ブラジルの旧首都、リオ・デ・ジャネイロで、十月十三日から十八日までに行われた第十四回国際女医会々議は多くの「みのり」を収めて無事に終了しました。日本からの出席者九〇名は、米国につぐ多人数であったことは前回のパリ会議の時と同様でありました。次の会議の参考のために理事の方々も多数出席されましたので、会の運営などについて多くの学ぶべきところがあったと思います。会議の詳しい内容など他の担当者によって報告されると思いますので、私はこの会議で感じたこと、二、三を述べ、来るべき東京会議はどうあるべきかを考えてみたいと思います。

会議の内容は充実していました。科学的部門においてはすぐれた講演が数多くなされ、また各国群別に行われたワークショップでは「家族計画」の討議が熱心に行われ、よい結果が得られたものと思います。会長が大学教授で

あり、また主催者側世話人も学者であったことが、このような最も学会らしい国際女医会々議をもたらしたのではないかと心ひそかに敬服しました。そしていつも国際女医会会議に懐いていた不満が、やや解消した思いでありました。それにしても各国からの出席者の熱心さ、出席率のよいのには感心しました。内容の好きに惹かれたのかも知れませんが、日本の会議のときも、出席者をひきつけるような内容と、すぐれた学会にしたいたいものだと思います。学会に出席して何か学問的に収穫がもたらされたというような会にしたいと思えます。

充実した内容に比べて、運営面でもやや不十分なところがあったように思います。私たちが最も不愉快にしたのは添田百枝先生の演題がプログラムにのっていないことでした。私はA班に参加し、リオに着いたのは十二日で、その時佐野先生によって

すでに登録もすまされ、部屋の割当てもして頂いてあったので、何の煩らわしさもなく、無事にホテルに落ちつくことが出来ましたが、しかしその時第一にきかされたのが、添田先生の演題がプログラムにないこと、それは再三、小野先生、佐野先生から申し出ていたのに載っていないということでした。そのため何日に添田先生の映画をさせて貰えるかと足を棒にして交渉しているという佐野先生の報告でした。演題を受付けていながら、プログラムにのせなかつた不手際はどうしたことかと腹立たしく思いました。プログラムにのっていないために、公式出張の形で出席された添田先生のお立場は非常に悪くなり、ご本人はもとより、私も本当に困ったことだと心配しました。急遽あとから出されたプログラムの映画の所に、十五日午前十時半に、添田先生のが載っておりませんでしたので、安心して言いましたところ、その日、その時間になっても行われなかつたのでした。交渉の結果、山崎倫子先生の講演のあとでやることとなり期待しておりましたが、プログラムにないという座長の発言で実行されませんでした。

憤慨するやら、怒るやら日本側は大分混乱しましたが、小野先生や佐野先生のご努力で十七日午前十時半に上映されました。立派な映画と、すぐれたご研究のために、非常な感銘を与え、万雷の拍手と賞讃の声が会場に満ち満ちて、この時間に上映出来たことは、より効果的であったことに一同満足しました。

しかし、このような行違いというか不手際というか、演者はもとより、私たち日本人全体を不愉快にまき込んだ事柄は、どこに原因があるのでしょうか、これは言うまでもなく主催者側の無責任さであり、不統一のためという外はないと思います。

十月十八日午前十時十五分から十二時までの時間に施設見学という項目がありましたので、一応参加したいと思いい、ロビーに出てバスのくるのを待っていました。待てども待てどもバスは来ません。十一時まで待ちましたとうとうしびれを切らして外に出てしましました。あとできいて見ましたところ、ついにバスは来なかつたということでした。

この経費にしては何と立派に開催された会議であったかと、私は感心しました。しかしそのために多少事務的に不届の点が出てきたのではないでしようか、日本ではもっとスムーズに上手にやりたいとつくづく思いました。事務的にもっとしつかりやらなければならぬと思います。それにはやはり事務を担当する専門家の手助けを得なければなりません。また経費もブラジル並みでは賄い切れるものではありません。この点皆さまのご協力を切にお願い申し上げます。洩れきるところ、家族計画の問題を会議に出したことに、より、ブラジル女医会が分裂して、寄付も集まらないし、多くの女医の協力も得られなかつたということでした。

第14回国際女医会総会の報告

国際連絡書記 佐野アヤ子

第十四回国際女医会は十月十三日から十八日まで、美しいリオ・デ・ジャ

(四九・一一・三)

ネイロで開催されました。会長はアメリカの Dr. Alma Dea Morani 参加人員は四五八名で二十八か国から集まりました。日本からは会員八十二名と同伴者八名が参加致しました。テーマは「人類の健康に及ぼす遺伝及び環境因子」で、日本からは添田百枝、山崎倫子及び小暮美津子先生の三人の会員の講演及び映画が行われました。ワークショップも大変盛んで、特に家族計画については、六か国語に分れて討論され、それぞれ総括されました。今度はどの部門でも出席率が大変よく、会としては成功でありました。ブラジルの方々はやつたりと行きていてプログラムが少し思うようには行きませんでした。が、ブラジルはブラジルなりのよい所を出して会議はとにかく予定通りに終り、私たち日本女医会員にとって、参考になることが数々ございました。

学術の面については山崎先生より報告がありますので、私は総会の報告を致します。

第一日の総会では会長、副会長、名誉書記および会計などの報告がありました。次いで各委員会 (Finance, Fund Raising, PR & Public Relations, Project, Theme, Education 及び Resolution) の報告があり、連絡書記の報告は時間がたりないため、会誌にのせることになりました。

次に Jubilee Members として五十年以上国際女医会会員であった人たちの表彰式が行われました。日本からは四十五名の方々がこの資格を持っています。本会議にご出席の次の七名の、三



開 会 式

第二日目の総会では一九七四〜一九七六の国際女医会新役員が投票の結果次のように決まりました。

- President Dr. Harumi Ono, Japan
- President-Elect Dr. Helga Thieme, Germany
- Honorary Treasurer Dr. Märtha Holmstrom, Sweden
- Honorary Secretary Dr. Martha Kyle, Austria
- Vice Presidents
- Northern Europe Dr. Henny Verhagen, Netherland
- Central Europe Dr. Adalina Huslein, Austria
- Southern Europe Dr. Marcella Sava-Borghron, Italy

- North America Dr. Minerva J. Buerk, U. S. A
- South America Dr. Susi Roedenbeck, Peru (re-election)
- Near East & Africa Dr. Isobel Robertson, S. Africa (re-election)
- Central Asia Dr. Mona Boonkhanphol, Thailand (re-election)
- Western Pacific Dr. Joan Redshaw, Australia

第16回国際女医会、すなわち一九七八年開催地は四か国 (イスラエル、インド、オランダ、西独) の中から投票の結果、ドイツが四十五票で選ばれました。(会長はドイツの Dr. Helga Thieme) 也。

この時の「テーマ」は投票の結果、Mass Media and Medicine とになりました。

その他バリ会議の報告が D. Heldstedt からなされ、次いで東京会議について小野先生が挨拶されました。最後に会費の値上げは次の二年間に行わないことになりました。やはり国際女医会本部は金不足のため、各国の女医会及び個人の寄付をつのっています。今年も日本女医会は五〇〇ドルの寄付を致しました。これとは別に赤須久代、小出つる子、佐野アヤ子、添田百枝、竹内静香、野村淑子、柳瀬路子の方々が一〇〇ドルづつ合計七〇〇ドル寄付して下さいました。

私は国際女医会の基金委員として、会員の皆様のお心にとめていただき機会をとらえてお贈りくださるようお願いいたします。

第14回国際女医会印象記

副会長 山 崎 倫 子

国際女医会第14回総会がブラジル、リオ・デ・ジャネイロで開催され日本からも90名が出席しました。日本からみれば、地球の裏側の国で、いろいろ面白い話もありますが、旅行記は他にゆずるとして学術面からみた印象をとりあえず御報告致します。

開会式は午後八時にブラジル国歌をもつて始まり、ジャーガス病の発見者で著名なドクターシャヤガスがポルトガル語で基調講演をなしました。今回の学会のテーマに「健康に及ぼす遺伝及び環境因子」を取り上げたことは誠に先見の明あり、かつ意欲深いものであると述べられ、遺伝と環境の関係には未だ不明な問題が残されているので充分討議してほしい、といった一般的な挨拶でした。

学術講演は、遺伝因子に関するもの17、物理的及び環境因子に関するもの12、と社会的、精神的環境によるもの8が行われ、他に上記に関連する5のワークショップが持たれました。次に大きく取り上げられたのは家族計画で、これもワークショップとして6のグループに分けられ (英語、フランス語、ドイツ語、日本語、スペイン語、ポルトガル語)、参加者の殆んど全員が何れかのグループに参加しました。今年国際人口年でもあり、先頃ブカ

レストで国際人口会議が開かれたこともあり、国際女医会も家族計画には大変力を入れておりました。もつともブラジルは家族計画には反対の立場をとっている国で、ブラジル女医会としては大変な苦勞があったようです。

子宮内生命に及ぼす因子、出産前期における遺伝性奇形、心臓奇形の原因ファロー四徴の家族調査、性染色体異常、先天性代謝異常、抗原、甲状腺疾患に於ける遺伝、遺伝要因と麻酔、精神病と遺伝、フェニルケトン尿症、鎌状赤血球貧血症、地中海貧血、遺伝相談、等々が遺伝関係の主な講演でした。

今までの医学はいわゆる感染性疾患に重きを置き、異常のおこる人間そのもの、個体そのものについてその本質を知る努力は少なかったといわなければなりません。そこで今回健康に及ぼす遺伝及び環境因子についてとりあげたことは、まことに時宜を得たものであり有意義であったと思われました。

すべての変異はその個体のもつ遺伝的組成とその個体の遭遇した環境との相互作用の結果として現われるものであります。皮ふの色、性別、体型、血液型等が遺伝によることは明らかですが糖尿病等は、遺伝的背景がありかつ環境因子が加わって始めて糖尿病として現われるものです。あるいは他の体質

性疾患といわれるものは遺伝要因と環境要因の相互作用によるもので、分裂病、そう瘻病、悪性新生物、リウマチ性関節炎等がこのカテゴリーに入ります。今までまったく遺伝病と考えられていた疾病が、妊娠中特に妊娠初期における種々の外的要素、例えば母親の栄養、代謝異常、腎疾患、感染症、ストレス、喫煙、アルコール中毒、放射線被曝、薬物中毒等の影響をうけていることが明らかになってきました。これは子宮内胎児死亡、早期胎盤剥離や流産を惹起するばかりでなく、未熟児出産の可能性を増大させ、更に生後の発育、時にはその一生を左右する障害例えば先天性心疾患、難聴、中枢神経の欠陥等を惹きおこす原因となっています。



ワークショップ「家族計画」

特に私共が問題としなければならぬのはX線の照射です。遺伝的障害として染色体遺伝子に蓄積される放射線の影響は不可逆性のもので、子々孫々

に伝承されて障害すると考えられています。放射線障害を決定する因子は、(1)線量、(2)時間線量関係、(3)放射線感受性ですが、診断に又治療にX線を容易に使用する現代の傾向からみて特に重大な問題として注意が肝要であることが強調されました。

薬品に関しても、抗腫瘍剤、抗生物質、その他、その用量、使用時期については特に注意が必要であること、近年染色体異常の出生例数の増加はトランカイザーによるものが多く、たとえ実験的に障害のなかった薬品でも体内では異なる反応をひきおこすことが確実になってきたこと等も報告されました。"ピル"の使用については実験報告等によると、殆んど染色体異常はおこさないとされ、日本を除き世界各国で広く使用されていますが、近年の疫学的調査によると、妊娠中に服用するホルモンは危険であることが注目されつつあります。服用者から生れ、育った若い女性に子宮頸部癌や癌腫の発生率が高くなっているといわれ、又直接的には、胎児心臓奇形、大血管転位等の発生報告がみられるという事です。"ピル"の禁止がむしる賢明と考へなおされる機運にあるとの印象をうけました。

環境要因としては、食物や水の汚染、騒音公害、有機燐、メチル水銀、等についての講演がありました。社会的環境を含めたものとして、人口移動、スラム地区に於ける健康調査、精神衛生、乱交と健康、刑務所に於ける女囚等についての講演もありました。

精神病の場合も、社会的、経済的、環境的要素が非常に重要な問題となっており、現代の過密、過疎、メガロポリス形成による過剰人口、生活方式の変化、人間関係、機械に使用される人間(産業形態の変化)等におけるあらゆるストレスが分裂病の背景になっているのではないかと、アメリカの興味



国際女医学会会長に就任して

小野 春生

このたびブラジルのリオで開催されました第十四回国際女医学会総会におきまして、皆様がたのご支持によりまして会長に指名されました。日本女医学会の会員の中にはもっとも有力な会長にふさわしい先生たちが大ぜいいらっしゃることには良く存じております。丁度ある時、ある場所に、たまたま英語を何とか話せる私がおりましたために、こんなことになったことも充分承知しております。しかしこのような結果となりましたことを宿命と思ひ、日本のために恥かしくない態度で、一生懸命およぼすながら東京大会が開催される一九七六年まで勤めさせていただきます。深く決心いたしました。

深い調査報告がありました。現在の日本にもあてはまることであり、同時に、近年さかんにいわれているヒューマン・エコロジーの問題は世界のどの国の問題でもあることが痛感されました。紙面の都合で簡単ですが要点のみを記しました。(四九・一一・五)

謝いたしております。スイスに登録されている国際医学会の中で国際女医学会が一番古い会でございます。この由緒ある会の会長の責務は重く、決して私一人の力で出来るものではございません。若輩で未熟者の私ではございますが、この大任を全うできますよう皆さま方のご援助ご指導を心からお願ひ申し上げます。

頼もしやわが小野春生姉今日よりは
国際女医学会の会長となる
フランス語ドイツ語に次ぎ英語にて
スピーチみごと万場の湧く

十月十三日から六日間にわたってひらかれた第十四回国際女医学会は約三十ヶ国から集った四五八名の参加者を得て、順調にスケジュールを消化して、十月十八日(金)夜八時、終宴を迎えました。盛装に着飾った各国女医がそ

来年は国連で婦人の年と定められました。世界の人口の過半数は女性でございます。日本女医学会として何とか婦人の健康増進または地位向上のためにつとめてゆきたいものです。新聞に毎日のようにゲリラとか犯罪の記事がみられられます。この人達には皆母親がいたはずですが、母親がもう少ししっかりしていたら、このような社会悪をおこさずにすんだのではないかと考えさせられます。女医として困っている母親にカウンセリングなり、指導なり、またはお友達になってあげることによってもっと良い社会が出来るのではないのでしょうか。また世界中の女性は平和を望みます。私共が力をあわせれば皆が楽しい住み良い世界になるのではないのでしょうか。争いごとがきらいでいる激力な会長でございます。

日本女医学会員の皆様、どうか、どうか一丸となつてご支援くださいますようお願いもお願い申し上げます。

れぞれ食卓に着き、宴も半ばを過ぎた頃、新しい国際女医学会に指名されたわが小野春生会長が万場の拍手に迎えられる演題に立たれ、次のようなあいさつを、フランス語、ドイツ語、英語の順で、にこやかになさいました。立

派な堂々たる演説と、チャージングなゼスチュアに魅せられてか、終るや否や万雷の拍手がわき上り、末席で聞いていた私は思わず涙ぐんだほどでした。同席の日本女医学会員の方々皆さんが、同じ感激をもたれたことでしょう。

(大原 記)

あいさつ

小野 春生

第十四回国際女医学会総会は本日終了です。私共はこの数日間ともに生活をし、ともに勉強をして参りました。

この楽しい期間を送らせてくださいましたブラジル女医学会会長のノロンニヤ先生、この会を成功させるために努力してくださいましたストルツ先生、ロム、ロベズ先生をはじめブラジル女医学会の皆々様に感謝いたします。本当に有難うございました。一九七六年の八月にはブラジルで受けたあたたかい心からのウエルカムを日本でお返ししようと思っております。皆様にもご挨拶したいと思っております。皆様にお待ち申上げておきます。

さて明日になりますとここにお集りの皆様はちりちりになり、東に西にお互の母国に帰ることになります。この国にも国際女医学会の会員のお友達がおられることを忘れずに、お互に助けあって一生懸命に、国境を越え、宗

教をこえて、全人類のための医学に近づきましょう。最後にいまだ一度、私が知っている大好きなポルトガル語、ムイント・オブリガダ(有難うございました)とブラジル女医学会の皆様にお礼申し上げます。

吉岡弥生賞候補者推薦について

昭和五十年吉岡賞受賞の資格者本会理事または支部長宛に推薦されるようお願いいたします。

締切期日：昭和五十年一月二十日

- 1 自筆履歴書(写真貼付)
- 2 業績
- 3 推薦理由書
- 4 当人の承諾書

国際女医学会への旅

Aコース 小出 つる子

MWIA'74

出席という名のもと

南米観光遊覧旅行

一、コース、羽田ボラボラ(仏領ポリネシア)ーグスコ(ペルー)ーリマプエノスアイレス(アルゼンチン)ーサンパウロ(ブラジル)ーリオ・デ・ジャネイロ(MWIA会議)ーマナオス(ブラジル領アマゾン地区)ーサンフアン(アメリカ連合の一つ)ーサンフランシスコ(USA)ー羽田。

一、言葉、ボラボラはフランス語、ペルー、アルゼンチンそしてサンフアンはスペイン語、ブラジルはポルトガル語、サンフランシスコは勿論英語、そして羽田で今まで頭の中に渦まいていた各国語をなげすめて日本語に戻ったときの気楽さ、税関吏に日本語でうまく説明出来る嬉しさ。



インカ帝国の遺跡 マチュピチュ

一、乗った航空機、エールフランス、エールポリネシア、エロペル、イベリヤ、クルセイロ、バリーグ、デルタ、パンナム、日航これ又日本語のアナウンスがまずあり、新聞を一ヶ月ぶりに配られむさぼるように読んだ。

一、ボラボラで無医島のこととて、私のたのんだ観光ハイヤー、豚をのせような六人乗りの箱に落ちないように乗って島内をまわった。運転手の母親が胸が痛いのでドクターなら診てくれないかといわれ、現地人の家を見る興味があって、オトローグだがとことわって訪問、マーゲンカレーパーらしい位としかわからぬ。「日本一の内科の女医さんがボラボラホテルにいらっしやるからたのんであげる」と三神先生の室につれて来させ、佐野アヤさんの持っていた血圧計と聴診器を取って来て診て頂く。彼の父が要領よく以前ニュージージラッドで写したとかいうレントゲンも持って来ていたので「古いT・Bがある」と先生の診察がはじまり、だんだん難しい英語仏語の話になってまたあわてて「佐野さん、ハワイより」とさがして来て通訳をたのみ、ガレンスタインらしいから、いづれニュージージラッドへでも行って精査の上、オペなり薬物なりで手当ての事ときまつて「メルシー、サンキュー」の雨、御礼に宝貝をもらって、古代の貝の貨幣時代の如き気持になった。

「日本一の内科の女医さんに診ていただいた島民は永く語りつくことになるかもね」とこっちは面白半分、三神先生にはご休憩の所お世話かけた次第。このボラボラ島へファキネ島から船で着くとき「あれ土人の家が水上に並んでいるわ、面白い写しましょう」とパチパチシャッターを切ったのだが何とそれが皆我々のホテルの個室、ニッパ椰子茸の家で診察をなさった三神御大の気持は、面白かったか、しんどかったか聞きもらした。

その夜の海浜砂浜の上でのタヒチアダンスと酒宴の楽しかったこと、勿論共に唄い共に踊った私達も、現地着をまとった半裸。

一、ペルーのグスコは臍の意の現地語、インカの臍の意らしい。凹地でもある。しかし海拔三千米以上の所で酸素欠乏症で全員アップアップ、ココ茶というココの葉を浮かしたお茶をのんで少し気分良好、食事はおいしいのに皆少食、私は大体船車の酔いは、心臓と胃と内耳が上等なら大丈夫と思ひ、渡航の時は常に色々なヘルツミッテルを持ってるので、中でも作用のマイルドな一般薬の救心というのが小粒でのみ易いのでいつもポケットに入っている。ボラボラの時船酔いした後輩が、私のポケットに入っていた救心で気分が良くなったので「これ何?」と聞かれたとき「私の鼻薬さ」と云ってのませた。それを覚えていて「先輩、あの鼻薬を頂かして!」という。その橋川、刈谷、小倉さんたちにのませたついでに身近かに居る友人達にのませ、叱咤激励して次の日のインカ遺跡マチュピチュへ出かけた。その列車の中で、三神先生と話したり(御大の元氣な秘密は不思議なほど)、列車内の現地の人のかなでるギターに似た珍らしい十八絃の楽器に合せて唄ったり陽気にしていたら、添乗員の人が「先生は海に強い土佐の人だからわかるけど、こんな高い所にも強いのは何故ですか」「そう私は平常高知(地)に住んでるの」と大

笑い。マチュピチュに着いて山の上の段々つみ上げられた巨石の城、上のほうに王墓があつてまたその石が大きく正確に組み合せてあるのに一驚、大阪城や名古屋城の巨石におどろいていたのがおかしくなるほどの工事。

一、インカ文化に心酔して、リマでは何が何でも、インカ文化のエッセンス、天野博物館へ行かねばならぬと、有志をさそつて、オンボロタクシーで英語の話せるのをさがしてもらつて市内一巡してから天野博物館へゆく。英語が話せるというので乗つた車が、わかる英語は、ゴーストアップ位、でも私のテレビレッスンによるスペイン語が何とか通じ、彼の説明の通訳をするはめになる。天野博物館は閉館中なのを無理にあけて頂き、館長からの説明、ミリ単位のヒスイにミクロ単位の穴をあけてある技術、天野氏のコレクターとして純粋な眼の輝き、古陶と古織物の今の技術でも解明出来ないすばらしさ、話せる人間と天野氏に信頼されてか、人には見せないと言つていた古代頭部手術の治癒跡のある頭骨、入歯の跡のある顎骨など(もつとも我々が医師だから特に見せて頂けたと感謝)話はずきない。見るものも驚きばかり、インカの医師の用いた頭骨手術器械なども手にとつて見ることも出来、広くて遠い南米、ナンベンも行く所ではない南米のエッセンスここに極まれり。

一、プエノスアイレスでは皮製品が安く皆の眼の色が変わつた様、南国土佐ではあまり皮コートに魅力を感じない

一、プエノスアイレスでは皮製品が安く皆の眼の色が変わつた様、南国土佐ではあまり皮コートに魅力を感じない



リオの植物園にて

ので私には猫に小判、アルゼンチンタンゴに酔い、コインを買い、切手を買い、街をぶらつき、ジャボネ・ジャボネと集つて来る土地つ子を、スマイルとプエノスディアスでかきわけて歩きまわり、サン・マルチンとボリバル將軍(勿論銅像)に挨拶、B.S.A.Sの三日間の休日を楽しむ。

風は乾いて爽快、日本の夏のほうが苦しい、コヒーを流したようなネグロ川でピラニアを釣りおとし、アマゾン本流との合流点で、黒河と白茶の本流が全く混合せずくっきりと白黒に別れたの二百キロの流れは、人種が混合融和しているブラジルに反して人種問題を考えさせられる。

一、マナオスを飛立つて三時間見ることがざりはジャングルとアマゾンの流れのみ、ただ大空と樹の海と、ただ大空と樹の海と。

Bコース 小俣 喜久子 旅日記断片

今年はずいぶん天候異常などありましたが、先生方にはその後如何お話ししていらつしやいますか、お伺い申し上げます。

よりやく天高く爽りの秋になりました。再来年はいよいよ我が国で国際女医学会総会が開催されますが全国の先生方にご協力、ご援助を頂かねば如何ともなりません。何卒よろしくお願い申し上げます。

国際女医学会総会は隔年に世界の各地で行われて参りましたが、今年ブラジルで開催され、日本からも総勢九十名が参加いたしました。

国際女医学会総会の模様は担当の先生が報告くださることと思ひますので、私は南米のあの雄大な自然と、過去の歴史、移りゆく現代・見たり聞いたり旅日記の断片をお知らせ申し上げます。

九月二十七日 私共B班は先発グループとして午後七時二十分羽田空港出発、機内で時計を七時間遅らせる。

九月二十八日 朝六時三十分、ロスアンゼルスに到着、ホテルで小休止の後再びブリグ機で出発、時計を二時間進ませる、八時間後にペルーの首都リマに到着、飛行場より出迎いのバスに乗る。周囲に展開される景色は土色煉瓦の半解体された家屋や壊れた土塀が放置されたままの廃墟の町である。然しホテルの近くになると急に近代的な高層建築が視野を遮ぎって間もなくホテルに着いた。直ちにアメリカカドルをペルーのソール(1ソール77円)に交換し翌朝九時二十分市内見物に出かける。ペルーはインカ帝国によつて最も栄えた中央アンデス古代文明の中心地であり、インカを滅ぼしたスペイン人が南米植民地支配の権力をふるつたのもペルーの首都リマである。

このリマは一年を通じて雨が殆んどなく、また太陽の出ることも稀であるという。私たちの着いた日は薄日が洩れていたが珍しいことだと現地案内人はいつていた。サン・フランシスコ教会の一隅に、インカ十三代アタワルパ皇帝を謀殺して、スペイン植民地を樹立した武将フランシスコピサロのミイラが、ガラス箱の中に横わつていた。

九月二十九日 十一時二十五分、イキトス空港着、古板を集めてつくつたガタガタバスに乗つて、イキトス市内(マーケット)見物、蛋白源にしているバナナを焼いたり、煮たりして売っていた。アマゾン河口から約三千百軒

のイキトスは、海拔百二十米の低台地のため、雨期には川沿いは氾濫し部落は水びたしになったり、流されたりするという。イキトスのホテルに一泊、翌朝八時にホテルの前より大アマゾン河を横断の屋形舟に乗り、一見風流な装いで、川面より川沿いの部落を眺めながら、大西洋方面に向い約二時間後にアマゾン川の数多くの支流の一つにあるアマゾンロッヂに到着する。このロッヂは米国の地理学者がアマゾン探険に来てそのまま永住し、現在は観光する人たちのため、簡易ホテルを経営している。パインに似たココナツジュースはとも味よく、セルフサービスの中食のメニューはトラドンのフライ、タピオカのフライ、塩味の煮豆等種類も多くあつた。雷鳴響きスコール一過、間もなく晴、長靴をはいてここよりアマゾンのジャングルに第一歩を踏込む。世界一の太木といわれるセイボの木、つるのからまつたバナナの木、木から木に渡された手摺り用の丸木を頼りに。蟹の横這いよろしく杖を片手にやつと湖水のある所に出た。ここからボートでインディオ部落に行き、草木の汁で頭を赤や青などに塗つて、かしらには美しい冠をつけたインディオたちの出迎えをうけた。

帰途はアマゾンの濁流をモーターボートで一時間イキトスの岸に着く。アマゾンにはピラニヤ、十米、二十米以上の猛魚、イルカ、淡水魚なども住み、肉どじょう等も棲息している。イキトス空港より再びリマに飛ぶ。眼下には果しない大アマゾン川とジャングル

ル、この大森林でペルーは五十年は賄えるという。リマでは午後より再び観光に出かける。国立人類考古博物館を見学。アンデス文明のすべてが展示され、解体されたミイラや副葬品の数々は、紀元前千年から二千年に製作された土器・金製品・織物・染色された品々等アンデス文明の繁栄ぶりが偲ばれた。それよりハイウエーを三十軒南下し、パチャカマの遺跡を視察。紀元前千年余の時代に作られたパチャカマ神殿や月の神殿、聖域の高所にある太陽の神殿はアンデスの人々の尊崇的であったという。案内人の説明をききながら往時を偲びつつ、遙かなる太平洋を眺め広漠たる砂丘に立つ時、果してこれが現世なのだろうかと思議な雰囲気を醸し出す。

十月一日 八時クスコ着、クスコは海拔三四三〇米で機内で飛行機から降りたらゆっくり歩くよう注意される。古い支那の町もかくあるかと想われるような東洋的なこの町はインカ帝国の首都でここを中心に道路は四通八達していたとのことである。これよりマチュピチュ城跡に出かける筈であったが、クスコの宿に着くや否や高山病にかかる人が続出して残念ながら私もマチュピチュ城跡の見物は出来なかつた。

十月四日 プーノ着、人口三万、コカパーナまで一四〇軒、これよりチチカカ湖畔に出る。海拔三千八百米で世界最高地の淡水湖として名高く芦の浮島を見物、歩きかたによつて足が水の中に入らずに入ってしまう。このような

浮島が八十島もありここに住んでいるインディオのグロス族は千五百人位に減少したとのこと、若者が皆島から出て行くからだという。チチカカ湖中に太陽の島という王様が住んでいた島や月の島など数々の島があり、これ等はインカ帝国華やかなりし日の語り草の中に生きていようだ。チチカカ湖はペルーとボリビア両国にまたがっている。



アマゾンのインディオ部落で

十月七日 ラパス着、時計を一時間進める。海拔四千米で町は摺鉢の底にあり立派なビルも底に建っている。摺鉢の斜面を上方にブラック建が多くなつて行く。遙かにアンデスの山々を眺めながら市内見物に出かける。ポリビヤは銀と錫の産地である。店頭にあるパカの製品やボンチョ、そして銀製品が眼につく。翌朝八時ホテルを出発、ティアワナコの遺跡を見物、カラサヤの半地下神殿、太陽の門、月の門があり半地下の周囲の石面に神像の石彫りが

が整然と並んでいる。この遺跡は数千年の間に発掘されたものであるが紀元前五百年から千年頃のものと云う。

十月十日 一時半、プエノスアイレス着、アルゼンチンは北緯にあてはめると日本の仙台と同じ緯度にあたる。市内観光に出かける。公園の美しいところと、一つ一つが立派な石の家になっている墓が印象的であった。毎日暗殺される人が二、三人はいるという。政局不安なプエノスアイレスは貨幣価値の変動も毎日のような話であった。然しフロリダ通りは東京の歩行者天国のような快適なショッピングセンターであるが、一泊では満足なショッピングは出来なかつた。夜十一時より本場のアルゼンチンタンゴをききに行つて楽しまれた先生方もおられた。

十月十一日 サンパウロ着、大阪のような商業都市ときき、何となく活気のある町である。

十月十二日 夕刻リオ・デ・ジャネイロ着、国際女医学会総会開催地リオの宿舎グロリアホテルには、各国から参加した女医さんたちの姿が散見される。翌朝は休日で海浜には大勢の人が思い思いの姿で賑わっていた。海辺からコルコバードの丘にそそり立っているキリストの像が、雲の間から出て来てくつきりと見え素晴らしい光景である。

十月十五日 リオより、サンパウロ着、一泊して翌朝五時ホテルを出発イグアスに向う。雨天で濃霧のため飛行機は途中に着陸し、霧の晴れるのを待つ。午後二時待望のイグアスに着く。イグアスの飛行場も霧に煙つていてこ

の周辺の霧はイグアスの滝の飛沫のせいでといわれたが、雨空は今にも降り出しそうな気配である。イグアスの滝は世界三大滝の一つでアルゼンチンとブラジルの国境に位置し大小二十一の滝からなり、四軒にわたる巾と七十二米の落差を誇ると案内書に記されてある。今日のイグアスの滝は霧の中で七色の虹は見えなかつたが、確かに大小さまざまの滝は美しかった。日帰りの予定のところ夕霧濃く、ついにイグアスに一泊することになった。

十月十八日 午後一時より国際女医学会の有志四十余名でグアナバラ湾内を船で観光する。お互に言葉は話せなくとも顔と顔は皆微笑をたたえて同じ思いで見物していた。帰路は皆で各々歌を唱うことにする。先ず日本から守安先生がソプラノで「荒城の月」を独唱、素晴らしい声で人々を魅了し、次に唱う人がなかなか現われなかつた。数時間の誠に楽しい親善風景であった。

十月十五日 七時四十分リオ発十時五十分ブラジリア着、南緯十五度、真夏の暑さ、赤土の新しい都市、二十一世紀の都市という。ブラジルの誇りはブラジリアとイグアスの滝であると案内人が話す。ブラジリアの広大な土地と大きな建築物、総合大学の校舎の巾は七〇米の長さ、教会の高さ広さ、すべてが驚きである。この驚きは百聞一見に如かず、実際に見なければ湧いてこない。

十月二十日 ベトロポリスに出かける。リオより北に六十軒、標高平均八

百米の高原で千五百年前ポルトガル人が植民地とした。人口二十万、軽井沢のような避暑地である。途中の山道の両側のあちこちにバナナ売りがいた。黄金のバナナという程の美味である。夕食はこの黄金のバナナでと大いに買込む。

Cコース 熊谷 美津子
北・南・中米飛び歩き

Cコースは大原先生を団長とした最も短い日程十五日間で国際女医学会総会に参加したグループです。長い間家を空けられないが是非総会に出席したいという熱意のある(?)者の集りで、その編成は関西医十一人、東京女医六人、東邦医二人、名古屋市医一人、同伴者四人に添乗員の久保さんの二五人です。

初めて顔を合わす人が多く、二、三日は何となくグルッピレンしていたが、たちまち皆仲良くなり、お互い一つの家族のような気持になり、少しのものでも分け合つて食べたり助け合つたりして和氣藹藹のうちに十五日間が過ぎてしまった。私共が総会に出席して感じ合ったことを大要すると、東京の時にはもっと良いものにした。それには先ず資金を一生懸命に集めよう。語学をそれ迄に学んでおきましょう。私共の旅程をスケ

ジュールを追って紹介します。

十月十一日 羽田を午後二時十五分 発バンアメリカンでアラスカのフェアバンクス經由ニューヨークに向う。フェアバンクスに午前三時に着く。

一面に雪が積っている中を歩いてゆき、身体を伸ばして約五十分休憩する。ドーナツとオレンジジュースのサービスを受ける。こんな処にはめつたに立寄ることはないであろう。一つの経験であった。三日月が冴えていて雪をつまんでみたらさらさらとしていた。零下三〜四度とのこと。ニューヨークのケネディ空港に着いたのは同じく十一日の午後四時すぎ、出発後約十五時間かかった。時差十四時間とのことで、もはや東京時間は間に合わなくなり名残り惜しいような気持ちで現地時間に合わせる。マンハッタンにあるホテルに落付くこともなく、夕食後五番街を歩いてエンバイヤステートビルにのぼり夜景を見る。バドソン川イーストリバーが見える。風が吹いていて肌寒い。

十月十二日 朝より市内観光をする。路上の所々に湯気が立っている。十月に入ると暖房が入り地下の配管の調節によるものとよく。ダイヤモンドセンター、セントラルパーク、カーネギーホール、ブロードウェイ、ウオール街、ハレム街等名前だけ知っている所を説明をききながら素通りの見物をする。道路には、大型車が駐車してある。ロックフェラーセンターではスケートをしていた。タイムズスクエアは浅草のような所とのこと、街角にドーナツを売っている。バッテリー公園より

フェリーに乗って自由の女神を見る。想像していたよりも大きかった。ミノル山崎氏設計の貿易センターの高いビルが午後の陽に照らされていた。この日の夜ニューヨークを出発して、総会開催地リオ・デ・ジャネイロに向う。ガレオン空港に着いたのが十三日の午前六時三十分であった。飛行時間は九時間。ニューヨークとの時差は一時間である。すべてがスローで入国のチェックに三十分かかり荷物を受け取るのに二時間も待たされた。

此処はさすがに陽が暑く素足で歩いている人もいいる。総会の会場でもあるグロリアホテルに着いたのは十時近かった。先着のAコース、Bコースの先生方にロビーでお逢いした時、お互に握手をして、はるけくも来ての再会を喜ぶ。先守安先生他代表の方が登録をして下さり一括してカバンやネームを受け取って下さる。七日間滞在する各自の部屋に荷物を置き、休む間もなく時間を惜しんでコルコバドの丘に行く。途中ティジュカの森を通る。マナカ(赤い花) ハイビスカス、桐の花、スイトロビア(シルバリーフ)の白い葉が青々とした木々の中にいきわ目立って見える。忍耐の花と言われるたんぽぽ位の赤い花が道の辺に群れ咲いている。両手を広げたキリストの大きな像が丘の上に立っている。その足元にも道の上にも沢山の大きな蛾が死んでいる。何か古代のままの感じがした。夜になるとこの像をいくつもの電灯で照らすようになっていた。夕食後八時より開会式が行われ、全員盛装で出席

する。ぞくぞくと各国の女医が入場され会場が満席となり立っている方もあった。私の隣はテネシーより来られた方で次回の日本へ是非来て下さいとPRする。Hawleyと言ふ返事だった。参加国の旗が正面に飾られ、その前にモラニー会長を中心に各国の役員が並んでおられる。わが小野会長も美しい和服姿で堂々と並んでおられ頼もしく思った。

十月十四日 午前中は学会に出席し午後から市内見物をする。モザイクのペーブルメントは海岸に沿って巾広く続き、更に新しく出来た自動車道路は車優先で走っている。白い色の高層ビル、ホテル、マンション等が林立していて青い海とのコントラストが素敵である。椰子の並木は絶えず揺れている。コパカバナの砂浜を靴をぬいで歩き小さな貝を拾う。この大西洋の波はおだやかで空も海も美しい。さわやかな風が吹いている。北の方に行くほど暑く南の方が寒いそう日本とは逆なのである。イパネマ海岸の方は波が荒い。アーモンドの並木の続く街を通りロドリゴデ・フレイタス湖をめくってボンデアスカルルの奇岩をケーブルで登る。グアナバラ湾や海岸に沿った街並の眺はまた素敵だった。

名でも多くの方が気安く発表された。十時四十五分より、全体会議で小暮先生、山崎先生の立派な研究発表が英語でなされ肩身の広い思いをした。午後二時から理事出席の総会が開かれた。大変熱の入ったものであった。その後開業五十年の方々の表彰式があり、日本では三神先生はじめ七名の方が表彰された。Cコースでは赤須先生、多田先生が表彰され拍手に一層力が入った。総会終了後着換えもそうそうにバスを連ねグアナバラ州知事公邸の招待レセプションに出席する。ワインをのみながら身近におられる方々に日本にも来て下さるよう話しかける。公邸からコルコバドのキリストが小さく光って見えた。

十月十五日 八時半より十時半まで各国語それぞれに別れて家族計画の討論をする。山崎先生が座長となられそれをまとめ、後で学会に発表される。最初に、柳瀬先生があらかじめ資料を集め研究をして来られたものを発表された。内輪だけの会合なので突然の指

名でも多くの方が気安く発表された。十時四十五分より、全体会議で小暮先生、山崎先生の立派な研究発表が英語でなされ肩身の広い思いをした。午後二時から理事出席の総会が開かれた。大変熱の入ったものであった。その後開業五十年の方々の表彰式があり、日本では三神先生はじめ七名の方が表彰された。Cコースでは赤須先生、多田先生が表彰され拍手に一層力が入った。総会終了後着換えもそうそうにバスを連ねグアナバラ州知事公邸の招待レセプションに出席する。ワインをのみながら身近におられる方々に日本にも来て下さるよう話しかける。公邸からコルコバドのキリストが小さく光って見えた。

今日のは添田先生の研究映画が上映されるのと、昨日に引き続き理事会がある。私共一行はテレソポリス、ペトロポリスの観光に行く。ここは一千米の高地で軽井沢のような避暑地である。百五十年前の建物や、ペトロ二世の宮殿を見る。宮殿の庭の中で鳥の声を珍らしいもののように聞いた。ペトロ二世公園でしばらく休む。丘陵を上って行く道々にフランボイヤ(火焰樹)ゴムの木、ジャカラダの紫の花、綿の木などを見る。また、高い木のない丘が続く瘦せた牛が放たれ貧しい家が点在している所も通る。煉瓦色の土が山肌にあらわになつていてところもある。杉の木、日本松、紫陽花などもこんなところで見るとまた感じが違って親しい。綿の実には二月頃に収穫するそ

うである。MALOCAという草葺のレストランで昼食をとる。焼きたての肉を二本の長い火箸のようなものに刺して目の前で切ってお皿に入れてゆく。食べ物で驚いたのはホテルの夕食に人参やピーマンなど長く切ったままレタスを敷いたボールに生花のように挿し入れたのを出されたことだった。馬の食事のようだといいながらC欠乏を補給したが、この山の途中に野菜を道にならべて売っていた。ガイド氏が人参を一束買って来て一本づつ配給して下さった。それが果物のように甘くて美味しかった。この人参をかじりながらバスに揺られての見物である。ついでだがりオでは湖や海を目の前にして、飲み水は買って飲むのである。コカコーラやジュースと同じ値段で二・五クルゼール(約百円)である。ビールが五クルゼールである。その代り果物が豊富でバナナ、オレンジは女中さんの食べ物とも言われるほどである。ところでこの山は陶器が有名で荷物の重くなるのを心配しながらタイルや花瓶など小さいものを買ひ、夕日に向って山を下りたのが六時近くだった。

十月十七日 朝八時ホテルを出発しサントスデモモン空港よりサンパウロへ日帰りの観光にゆく。約五十分の塔乗でコンゴニヤス空港に着く。サンパウロはリオと全く異った感じで産都市だけに活気があり街の中はいろいろな人種の人、ひとで一杯である。五月二十三日通り、お茶の水橋等と言う所を通る。地下鉄の工事中で今南北線を作っている由、自動車も沢山で日糸

人が七十五万もいる由。いまは二世の時代で四世までいるそうである。イビランガ公園のブラジル独立記念塔や高級住宅街を見てブタンタン毒蛇研究所を見学する。クリニカ病院はいま日本脳炎が流行しているのを見学が出来ないということだった。

十月十八日 午前中日本紹介の映画が上映された。午後のグアナバラ湾クルーズには参加しないで少し休養し友人四人と市内を散歩する。近くの大統領官邸の博物館を見学する。原住民の昔からの生活様式や職業を人形で現わして飾ってあり興味深かった。夜八時より最終宴会があり会場が狭い位であった。小野先生がフランス語、ドイツ語、英語としてブラジル語で挨拶をされたことは素晴らしい、出席者の皆に深い親しみと感銘を与えられた。各国の方々と握手を交しお別れを惜しむ。終了したのは十一時半頃であった。雨がひどく降り出し雷鳴をきく。リオもサンパウロもトイレの紙が水洗用でないため使用済のものは備えつけのバケツや籠に入れることになっている。紙を輸入している国である。

十月十九日 今日から観光のみの旅となる。雨の中を九時十分出発ペルーの首都リマへ向う。機窓からチチカカ湖を見る。アンデス山の上空ではかなりの揺れた。ホルヘチベス空港に四時三十分に着く。ペルーは共産国のため手持の円と弗の申告をする。空港から街までの間は荒地で樹木もなく砂漠のような感じであったが市街は賑やかである。サン・マルチン広場の前にあるホ

テルに着いたのは夕方では肌寒い、金銀細工店、毛皮店が目につく。歩いている人達の服装はボンチョ、マント、ケープ等を着ている。しかし大方は貧しいスタイルである。インカ時代のよいうな格好をしている人も見る。

十月二十日 リマは古いリマとモダンリマの二つに分けられている。先ずモダンリマから見学する。日本人が六万人いる由、ユーカリの大木、アカシヤの木、その根方にタンボボが咲いている。街角にアカンサス、グラジオラスなど一杯積んだ花屋が目立つ、中央広場にマーケットがあり、中央大寺院には三百年も経っている五十四才で殺されたフランシスコピサロのミイラを見る。プール付の高級住宅街と対照的に貧民の家も見る。アドベといって土をねって日に乾した煉瓦で作った家が崩れかかっている。道路はごみの山である。サラサル公園の下は、ワイキキ海岸といわれている美しい海が見える。斜面には紫のひる顔が群生している。ひな芥子も自生している。プーゲンピリヤ、ジャカラランダはもうおなじみの花になった。オリブの町にオリブの白い花を見る。油をしぼった古い機械が記念に残されている。ピサロ邸トリー・タグレ宮殿に土人をつるして殺しその椎骨を模様のようになべ庭石を囲んであった。陰惨な中庭を心重く歩く。牛革の椅子などみても心暗くなった。リマック川(ささやく川の意味だそうだが)は泥水で濁れている。一年に一週間しか雨が降らないと言われたがああ美しい草花はどうして咲く

のであろう。十二時半アルゼンチン航空でリマとも別れコロンビア国の首都ボゴタ経由でメキシコに向う。十月二十一日 メキシコを知るのには五日間かかるそうだが、今日一日で見物する。スペイン人を父に原住民を母として生れたのがメヒコ、即ちメキシコ人である。一日の中に四季があるというとおり昼は暑く朝夕が寒い。外務省の隣に日曜日だけ開かれる泥棒市がある。アステカ文化の遺跡、サンタマリヤグアタルベ寺院では信者達が遠く門前から膝行して礼拝しつつ寺院に入る姿を見る。テイオテイウアカン遺跡、月、太陽を表したピラミットを見る。芝草の中に小さな白い花が咲いていた。蟻が沢山移動していた。静かに古代をしのぶいとまもなく集合、大きな洞窟の中のレストランで昼食をとる。リンゴジュースが美味しかった。天井から日が射している形で涼しく自然をうまく利用したものである。チャブルテック公園の噴水や、いたるところに噴水があり彫刻を見る。四十三年に開催されたオリンピックスタジアムはアウトノモデメヒコ大学の校庭であった。メキシコは世界の天国といわれる。住は日本の面積の五倍半、食はメロン、トウモロコシが一年中ある。衣はシャツ一枚ですごせる、というところ。そんなせいかメキシコ人は余り働かないとのこと、「明日のために今日を犠牲にしない」という生活である。六十六才になると一番最後の月給を一年中もらえるそうである。

十月二十二日 午前中希望者は人類学博物館を見学に行かれる。私は一人で公園を散歩する。午後二時十五分最後の観光地ロスアンゼルスに向う。時差一時間戻す。六時半ロスアンゼルスに着く。空港からホテル迄の間先ず目立ったのはバッタのような形をした機械が丘や畑に据え付けられ動いている異様な風景である。油田の丘だそうである。芒の穂がゆれ紅葉した樹木や蕨が美しい。ハイウエーが縦横に走っている。この夜はゆっくり休む。

十月二十三日 九時に出発、ハイウエーの両側の青い木々は毎日一回水をやっている由、ファーマーズマーケット、ハリウッドボール、大野外劇場、舗道に星のマークのある有名な道サッシュット大通り、映画スターの大邸宅グローマンズチャイニーズ劇場の前に俳優の手形、靴形などを見る。庭の手入れをせぬと罰金をとられる、消防車の梯子で椰子の木の手入れをするなどときく。最後に三班に分れて四時までドイツニーランドで遊ぶ。私も第一班老人組は先ず汽車に乗り、昼食を食べ次に馬車に乗る。舟でカリブ海の大賊や未来の国やジャングル等を見る。

次にアメリカ全州の映画を見て、最後に潜水艦で海中の有様を見た。午後七時より近くのヒルトンホテルの「菊」でお別れパーティーをする。一人一言ずつ挨拶をする。皆が楽しかった十四日間の旅を感謝し合ったことでした。また学会については最初に書き置いたような覚悟など申され、歌や踊りのご披露もあって名残りつきな会であった。

十月二十四日 六時に荷物を出し、七時朝食、空港に向う。ホノルル経由の子定であったがサンフランシスコ経由に変更になる。空いているジャンボ機の中で、横になって寝ることが出来た。サンフランシスコで一時間休息。昼夜のけじめのない機内で二十五日を迎える。午後三時に富士山が見えた時皆が思わず声を出し手をたたく。予定より少し早く羽田に着いた。



ヒバリーヒルにて

初めて海外にお出かけの方、何回か経験のある方も、お互に助け合って新しい友情が芽生え、あるいは更に友情が深まったことは得難い収穫でした。また天候に恵まれたことも僥幸でした。学会のあいまに有効にいろいろの見物、見学をすることが出来たこと、大きなトラブルもなく全員が無事に帰国出来たことは団長さんはじめこの旅程を企画してくださった守安先生、行き届いたエスコートを頂いた大久保さんのおかげと感謝いたします。

三神美和会長叙勲

三神美和会長が秋の叙勲で

勲三等 瑞宝章 を受章されました。

衷心よりお祝い申し上げます。

山崎倫子副会長の栄誉

ブラジル国勲章授与



CABRAL 勲章

ブラジル国に対する友好と親善に寄与されたことに対して、カブラル勲章が授与されました。聞くところによると、姉は御家族がブラジルに移住されて以来二十年にわたって、来日されるブラジル人、日系ブラジル人一世、二世等に対していろいろのお世話をされて来られた由です。又時にブラジル移住者の行方不明者を探す運動、留守家族を励ます会のお世話、移住者のお嫁さん探し、里がえり日系ブラジル人の出張健康相談、出張無料診療等、長年にわたる好意が、実を結んだものと思われまます。姉は余り突然のごとで夢のようだと恐縮しておられますが、目立たない好意の積み重ねが認められたことは素晴らしいことだと思います。

モラーニ博士のこと(二)

◆モラーニ邸での十日間◆

大原 一枝

前号につづいて本号では一九六七
年九月のモラーニ邸滞在の日々を当
時の日記をもとに綴ってみよう。

九月二日(土)

——ニューヨークからフィラデル
フィアへ——手荷物行方不明のこと
今日はリード女史のアパートでのニ
ューヨーク滞在最後の日である。

早朝六時起床。アダム氏(リードさ
んの弟さん)既に起きていて、浴衣姿
でコーヒーをのんでいた。イングリッ
シュマフィンがいかか? コーヒーか
紅茶か? チーズは? などと、いろ
いろ世話をやいてくれ、結局、マフィ
ンの上に大量のオランダ製の黒い皮の
中に入ったチーズをのせてオーヴンで
やいてくれる。

三日つづきの連休第一日だから少し
でも早く飛行場へ行った方がよかるう
と言われ、七時すぎ家を出る。タクシ
ーが中々来ない。時間は充分あるから
構わないがといながら、アダムさん
が、次の街角までタクシーを拾いに
行ってくれる。合のコートを来てい
も身ぶるいするほど寒いが、十一年前
も今年も、暫らく滞在したこのなつか
しい家の窓を見上げ、また、リバーサ
イド公園の大きな樹々の枝の間から透
けて見えるハドソン河や、すみ切つて

雲一つない秋の空を眺め、おそらく再
び来ることはあるまいと思う。

アダムさんの拾って来てくれたタク
シーに大荷物と共に乗りこみ、慌しく
別れを告げ、ウェストサイド・エアラ
イン・ターミナル(四二丁目、十番街)
へ、ハイウェイを通って割合に早く着
いた。赤帽に荷物をTWAカウスター
へと頼みチェックインする。予想外に
人が少い。十五分毎に出るというニ
ューアーク行きバスに乗りこみ、市中
からハドソン河の下のトンネルを抜け
ると、間もなくニュージャージー州ら
しい。

朝の清々しい空気と陽光の中を約三
十分走り、アメリカには未だ広い空地
があるなあと考えているうちニューア
ーク空港着。午前八時。出発までに二
時間もあまる。早いのて売店も一つしか
あいていない。

飛行機は定刻に出発、フィラデル
フィアに向う。約三十分でフィラに着
いたが降りる人は僅か七、八人、大方の
人はサンフランシスコ迄乗る人々であ
る。ミセス・ジョンソンが迎えに来てく
れていた。この人はモラーニ教授の親
友で同居者、未亡人の女流画家、一九
六四年に関西西大へも来たことがある
ので旧知。西洋式の抱ようとキッスの
挨拶がすんで、二人で荷物を受取りに

Baggage Claim へ行ったが、待てど
暮せど私の荷物が来ない。私の乗って
来た飛行機は十一時十五分にサンフラ
ンシスコへ出発するというテレビのサ
インが出ていたので、早く飛行機から
降りてくれるよう頼んだが、もうし

ばらく待てと言われる。

結局、飛行機は出てしまい、荷物は
来ないという結果になった。Lost and
Found Department へ行き、トラランク
の特徴その他を話す。ニューヨークで
チェックインしてから出発までの時間
が長すぎたので、あるいは早い便への
誤載の可能性も考えられる。あれやこ
れや空港で三十分余り時間を無駄にし
たのち、飛行機がサンフランシスコに
着く五時半頃まで待って空港へ電話を
することにして、ミセス・ジョンソン
のプリムスに乗り、約四十分でモラー
ニ教授の家に着いた。

モラーニ家は、フィラデルフィア北
郊の閑静な森林をひらいた土地に建っ
た大規模なアパートの一戸で、四十二
エーカーの緑に包まれた建物。中央玄
関のロビーもホテル並みに広々として
いて、ここではコンサートなども時々
ひらかれるそうである。広々とした芝
生に憩う人影が二、三人見え、その向
うはうっそうたる大木の森林と青空、
全く静かな環境である。

モラーニ邸はこのアパートの七階の
一戸で、広い客間と四寝室、書斎、食
堂、台所から成り、通いのメイドが毎
日来るという生活である。各部屋には
彼女の父の彫刻や絵画、彼女自身の画
と彫刻、画家であるミセス・ジョンソ
ンの油絵、水彩画のほか、旅行先の国
々から集めて来た美術品のコレクション
の数々があり、ことに中国、韓国、
台湾から求めたり、贈られたりした逸
品が多い。
薩摩焼の美事な大壺をみつけたので

由来を聞くと、かつて日本に進駐した
ことのある将校の美術品マニアからゆ
ずってもらったものという。骨とう好
きのように、ミセス・ジョンソンによ
れば、モラーニは父親ゆずりで一級の
芸術品を好むということである。並べ
てあるものの中にはいわゆる土産物屋
級のつまらぬものもないではないが、
大半はいいもので、イマリ、オリベな
どの名も知っていて、東洋美術につ
いての本も多くあった。

一通り説明されたあと、私の部屋に
あてられたモラーニ教授の書斎に案内
された。

ソファーから折たたみ式のダブルベ
ッドを引出してくれ、少し休んだらと
いうミセス・ジョンソンは物静かなや
さしい人である。書斎の机の上には、
Stationary of Dr. OHARA とモラ
ーニ教授自身の筆跡で書かれた紙の下
に、エアログラム、絵ハガキ、普通ハ
ガキ、封筒、便箋などが並べられてあ
り、バスルームの洗面台の横にはタオ
ルのセットのほかに、刺繍や美しいド
ロンワークのいくつもの手拭き、がきれ
いにアイロンされて使いやすいように
順にずらして並べてあり、ホテルでは
味わえない家庭らしい温か味が感じら
れてうれしい。あとで、これらはみんな
主婦役のミセス・ジョンソンの配慮と
わかった。昼食をすませたあと少憩。

午後五時半モラーニ教授帰宅。アメ
リカ式抱ようで久瀧を叙したのち、彼
女の設定した私のフィラでのスケジュ
ールを示される。見れば今晚は市内の
レストランでの歓迎の夕食、明日の日

曜日は午後一時にモラーニ家でのペンシルヴェニア女子医大の前学長マリオン・フェイ博士 (Ph. D.) はか三人の旧知を招いての歓迎昼食会、月曜日は Labor Day で祭日であるが、女子医大で下顎骨々髄炎の手術見学、夕方六時からパーク女医 (ミュンヘンの国際皮膚科学会)、モラーニの友人であると私に話しかけて来た皮膚科医、このあと一九七一年米国女医会長となり、また今回のリオの役員改選で国際女医会の副会長になった人) の家での夕食会への招待。火曜日は午前中モラーニ教授の手術見学後、クリケットクラブにおける女子医大主催の私の歓迎ランチョンパーティー、水曜日はパーク女医の案内でベン大皮膚科ならびに図書館訪問 (当時筆者は関西医大図書館長を兼任していたため、各地の図書館視察をできるだけ行った)、夕食はフェイ学長の招待等々、連日のタイトなスケジュールに内心少々うんざりする。元来社交的な会合が苦手なので、遠慮なくそう言ったところ、モラーニ教授曰く。

「与えられたチャンスはできる限り逃すことなく、多くの人々と知己になり、あらゆることを経験すべきである。旅行の一つの意義でもある……!」と。兎も角観念して万事お任せとする。夕方はフィラデルフィア全市街の夜景を見下ろすことができる新築のビル最上階のレストランで三人の夕食。帰宅後入浴就寝。この夜晩くTWAから荷物の方が未だわからぬ旨電話連絡があった。長い一日。

九月三日 (日)

午前八時少し前まで寝る。朝食後、ミセス・ジョンソンとモラーニ教授の二人の料理を少し手伝う。十時にメイドが来る。タルマという中年の黒人女性。十二時すぎ、広いリビングルームの隅の灯りをともし、静かな音楽を流し、名も知らぬ小さな野の花と、草の実をつかっていたの私のミニ活け花——生れてはじめての小原流ならぬ大原流——で食堂の壁際の卓上を、伊万里の皿を背景にして飾る。ミセス・ジョンソンが手伝ってくれ、ためつすかしつ眺めながら、ラヴリィ!! とウィンクしてみせる。

一時少し前、三人の来客次々と御入来。久瀨を叙しながらアペリティフの飲みもののグラスを手に、絵やコレクショョンを見せたり、知人の話をしたりして三、四十分をすごしたのち、いよいよ食堂に客を案内して昼食がはじまる。私を歓迎する意味から食器はすべて日本のもので、肉皿は伊万里の大皿パンには同じく伊万里の小皿が用いられ、銀の食器、グラスなどはミセス・ジョンソンのおばあさんゆずりというデラックスなもの。主料理はチキンレバーと青いぶどうの実の煮たのとり合せ、レバーの臭みがぶどうの酸味で消されて美味しい。デザートは手製のオレンジプディングの上にメントール入りデューリーと泡立てたクリームをかけたもの。客は四時に帰る。食卓での会話に疲れる。夕食はみんなスーブだけですます。

午後九時半、空港から電話が入り、

荷物を今から届けるとのこと。十時半アパートの門番が受取って届けてくれた。チップをやる。

九月四日 (月)

午前九時半、モラーニ教授のサンダーボードに同乗して、女子医大の病院へ。手術室の規模など、日本と大差なし。患者は四十才位の肥った男性、左下顎の骨髄炎の切開術を若いレジデント (男性) を指導し、手際よく排膿、ドレンを挿入して終る。

モラーニ教授の回診の間、私は図書館を見る。祭日でもあけてある。数人の閲覧者がいる中を見て廻る。入口の陳列棚にモラーニ教授の製作したこの大学の外科医、産婦人科医などの手の石膏型が並んでいた。また、大学の歴史を物語る写真を展示してあるショウケースの上には次の語句をタイプした紙片がはってあった。

Recently Cigarettes
have been "Parked"
on this Display Case!!!
Need More be Said???

We think not!!!

どこの国でも若い世代のすることは同じだと思ったことであった。

午後一時、モラーニ教授の開業している診療所へ行く。無人のオフィスに入り、奥の一室で、持参のランチで昼食。次で公園の中の日本庭園を見に行く。かなり純日本式の本格的なものながら、あとの管理が不十分な様子で、考えさせられる。

帰宅後二時間ほど休んだのち、ミセ

ス・ジョンソンと三人揃ってパーク家へ向う。フィラデルフィア市街地を通り抜けて、かなり遠い距離にある郊外の高級住宅地であるが、道路から家屋が見え難いほど敷地の広い家が多い。

Dr. Mirava Buck は前記のようについて教週間前にミュンヘンの学会で初対面の人で、一九七一年度にはアメリカ女医会長になった人であるが、目指す彼女の家も、昔の広大な住宅の一部で、一昔前は馬車が入り込んでいたという高いアーチ型の門をくぐり抜けて入ると、広い芝生の庭で、既に五、六人の人々が車についていて手をあげて歓迎してくれる。パークさんから、一人一人に紹介され、のみものをもらう。そのうち自動車で隣人夫妻 (パーク女医の家主、大変な富豪で三十五室もある大邸宅にすんでいるという) がやって来る。パークさんに裏の野菜畑を見せてもらう。畑は森に接して隣家との境界はわからない。

昨年は生後四ヶ月位の若い狐がこの庭にあらわれ、彼女から二十尾あまりものにわたりを与えられて大きくなったという。来客一同この話に興じていると、彼女は家の中から彼女自身撮影したというカラー写真を拡大したのを持って来て見せてくれる。私にミュンヘンの国際皮膚科学会の芸術部門にこの写真を出品したのだが、見なかったか? と聞く。残念ながら見なかったと答える。写真の狐は正面に顔を向けた横の姿で、いかにも可愛らしい。雌狐だという。どうしてもわかるかという、姿、形がやさしかったからと彼

女は答える。森に放してやったらもう帰って来なかった由。人々異口同音に珍らしいことだと写真を眺めながら言う。

妻揚子につきさした温かいオードブルが供されたのち、家に入る。室内には細長い卓の上に、美事な姿のままのキングサーモンがスライスされて二つの大皿に盛り立ており、サラダ二種が添えてある。銘々好きだけとりわけ思い思いの場所に椅子を占めて食べながら歓談。パーク博士の巻貝のコレクションも見せてもらう。デザートがすんだ頃、モラーニ教授の「We Have more three guests」という大声と共に、三匹の大型ブールドル犬がドヤドヤと侵入、喜んでガサガサ歩きまわる。家主夫妻の愛犬が、召使いと散歩に出た帰途、夫妻を迎えに立寄った由。犬好きの私にとって思わぬご馳走であった。午後九時帰宅。(以下次号)

アメリカの産婦人科
施設を見学して

常任理事 柳瀬 路子

東邦大学林教授を団長とする訪米産婦人科医療技術調査団に加わって、四月二十七日より五月二日までラスベガスで開かれた第二十二回全米産婦人科専門医会議に出席した後、ロスアンゼルス、ニュー・オーリンズ、ワシントン、ニューヨーク、ボストン、シカゴ、サンフランシスコを廻り、各地の大学

産婦人科を訪ね詳細な見学をする事が出来たので、二、三の見聞を御報告申し上げたい。私は産婦人科専門医ではないので観察も皮相の域を脱しないと思うがその点御容謝を願って、また誤聞でもあれば御叱正願いたいと思う。

ロサンゼルス UCLA の前通り、角から二軒目の所に Tyler 教授のクリニックがある。小さな看板のある一階間の階段を登ってゆくと四階の全床を借り切って不妊症のクリニックをやっていた。待合室はやや広い(六×八m)応接間風の構えだが、そこから吊鉤の手にのびた一間廊下の両側に並ぶ一四一五の小部屋は、いづれも六、八畳位の狭い部屋で、各小部屋が問診—顕微鏡検査—内視鏡—X線検査—研究室になっている。折良く Tyler 教授のカウンセリングを実見した。先ず夫婦一緒に問診を受け次に精密検査に廻される。指導には学校の先生である Mrs. Tyler が携っていた。この Tyler 教授のオフィスでは二十五年前から人工授精をはじめ、成功率は七〇%、人工授精で生れた子供はすでにハーバード大学へ進学しているという(この記事は Look 誌 Sept. 17, 1957 に載っていた)。J.J.G. Marie 教授の研究室で精子をアンブルに密封し小型フロパン位のボンベに吊して液体窒素で冷凍貯蔵する過程を見せてもらった。こうして地方廻りのセールスマンや船員の精子を貯蔵し、適当な時期に妻に人工授精を行うのだそうだ。患者の支払う金額は検査料二〇ドル、施術料四〇ドルとのこと。学生から精子を

買受ける時は二〇ドル払うとのことであった。
ニュー・オーリンズでは Turere 大学の有名な教授 Schally の下で、L.H.R.H. の共同研究をしている有村明博士が待っていて下さり、Dr. Schally にもあい、有村博士、西博士(医科歯科大・内科)の御案内で各教授を歴訪、またチーフ・レジデントの案内で病室・研究室を見学した。
Trebne 大学の方は有料の患者のみを扱い、二人部屋(六坪位)で室料一日五〇ドル、産婦は平均三日入院するが病院に三〇〇ドル、医師に三〇〇ドル払うとのこと。医師は七人いるが各人月に一〇〇一五のお産を持つというから幾許の収入になるか御計算下さい。
中食後、シンシッピーの河岸に沿い古い家並と夾竹桃の街路樹の間をドライブして DCHSNER CLINIC を訪ねた。この病院は病室も研究室も Turere 大学と L.S.U. (ルイジアナ州立大学)とで半分ずつ使っているそうで(主任教授 AVE. MICHEL) 慈善病院である。年間二、〇〇〇のお産があるという。四人のチーフ・レジデントと二〇人の R. がいる。C.R. になるのには三〇〇の手術例を経験する必要があると言っていた。
この病院は、手術室が一階にあり(ロサンゼルス UCLIA では地下にあった)滅菌室になっている。白血病や腎移植の特別室も上の方になっていた。Trebne 大学の学生の入学率は五〇人に一人という厳しさを米国第一

の有名校であり、L.S.U. の学生とは格段の差であるという。この研究室も日本人が多すぎると指摘されて今年中には大分帰国すると言っていた。
翌朝八時 AVE. MICHEL 教授の C.C. に出席する。林先生は教授の席、我々は階段教室の最前列に坐らせられた。症例は産後のダグラス窩膿瘍と高血圧患者のお産の二例で、昨日案内してくれた C.R. や昨日握手した教授・医師が種々意見をのべていたが、とりわけて感心する事もなかった。
ワシントンでは、ジョージ・ワシントン大学に Marlow 教授を訪ねた。

ここで Jacobson 博士の染色体の研究が注目された。五年に五〇〇例やったという。稀少例も多く持っていた。同行の愛知医大の野口講師が「肩唾と思っていたら本当にやっていたんだな」といって感心していた。染色体を調べてみて、ダウンを起す可能性のある時は、両親が希望すれば一八週に人工流産を行うと言っていた。
最後に訪れた SONOGRAM の部屋で、担当の中南米の人と思われる医師が「この胎児は七週なのに四週位の大さきの頭蓋である、斯様の症例は云々……」と熱弁を振った。アメリカはこの研究室にも種々な国籍の研究者がいてお互いに鏡を削っている様子が見え思わず微笑を誘った。
午後にはコロンビニア大学の産院を、Jaffer 教授(案内で一週した。Jaffer は輸血の人。十年ロンドンでサリドマイドの研究をやり、ここへ来たという。このお産は月に三〇〇あると

いう事だがその半分がチャリティだといっていた。ベットは一五五。五人の医師と二人の R. 患者二人に一人の看護婦が診療に当たっているという。この手術部門は上層にあった。手術と腹腔鏡が日に五、六という。見ていると外来者の往來する廊下を輸液の針を腕に固定された患者が、支持台を自分で持って愛嬌を振りまきながら歩いてゆく。これは叱驚した。全般に言って、アメリカの病院を見学して感じた事はどこも組織化されていて、人手も多いということだったが、ここでも未熟児など一対一(三交代を考えると一対三になる)で看護婦が管理していた。今の日本の設備では未熟児など預る事は不可能だと団員の皆さんが言っておられた。
ニューヨークでは AMERICAN BRANDS INS. に TETZEL 博士を訪ねて家族計画の話聞いた。金の大きなベランダを胸にブラブラさせて黒い備



ジョージワシントン大学前

服のような服装をした顔のおぢいちゃん。会議室のようなところでスライドを使って手馴れた話。
次に Tower Bldg. のロックフェラー研究所に小出博士を訪ねた。小出博士は中国の大人のような物静かな日本人二世。財団より Tower Bldg. 五、六、七階を占める研究部門を提供され、Segal 教授指導の下にホルモンの生化学方面をやっておられる。日本人の研究者も多く日本の第三研究室といわれているようだ。日本の学者の動静に通じておられるのには、一驚した。この研究所には昔、野口英世博士も在籍されたそうで、彼の黄熱病の研究もここで初められたのであろう。研究室を廻り各主任研究者を紹介して下さったが、日本人、台湾人、印度人など多く、特異の印象を受けた。北大から藤本さんという人が染色体をやりにきていた。
午後は、パンナム・ビルの前にある see through look な Ford Foundation Bldg. の五階に OSCAR HARKAVY 博士を訪ね、SANDERS および SOUTHAM 女史(コロンビニア大学の産婦人科教授であった)の列席の下に人口問題の講義を聞いた。主にアメリカにおける人口流産の統計と死亡率に関してであった。
次いで BRISTOL MAYER INTERNATIONAL DEVISON を訪ね M. GUNTICK 博士、ABORTUS DEVICE (シリコーンのラミナリア代用品)の話聞き試用を頼まれる。日本は大きな市場なのであろう。最後に駆け足で

の有名校であり、L.S.U. の学生とは格段の差であるという。この研究室も日本人が多すぎると指摘されて今年中には大分帰国すると言っていた。
翌朝八時 AVE. MICHEL 教授の C.C. に出席する。林先生は教授の席、我々は階段教室の最前列に坐らせられた。症例は産後のダグラス窩膿瘍と高血圧患者のお産の二例で、昨日案内してくれた C.R. や昨日握手した教授・医師が種々意見をのべていたが、とりわけて感心する事もなかった。
ワシントンでは、ジョージ・ワシントン大学に Marlow 教授を訪ねた。
ここで Jacobson 博士の染色体の研究が注目された。五年に五〇〇例やったという。稀少例も多く持っていた。同行の愛知医大の野口講師が「肩唾と思っていたら本当にやっていたんだな」といって感心していた。染色体を調べてみて、ダウンを起す可能性のある時は、両親が希望すれば一八週に人工流産を行うと言っていた。
最後に訪れた SONOGRAM の部屋で、担当の中南米の人と思われる医師が「この胎児は七週なのに四週位の大さきの頭蓋である、斯様の症例は云々……」と熱弁を振った。アメリカはこの研究室にも種々な国籍の研究者がいてお互いに鏡を削っている様子が見え思わず微笑を誘った。
午後にはコロンビニア大学の産院を、Jaffer 教授(案内で一週した。Jaffer は輸血の人。十年ロンドンでサリドマイドの研究をやり、ここへ来たという。このお産は月に三〇〇あると

いう事だがその半分がチャリティだといっていた。ベットは一五五。五人の医師と二人の R. 患者二人に一人の看護婦が診療に当たっているという。この手術部門は上層にあった。手術と腹腔鏡が日に五、六という。見ていると外来者の往來する廊下を輸液の針を腕に固定された患者が、支持台を自分で持って愛嬌を振りまきながら歩いてゆく。これは叱驚した。全般に言って、アメリカの病院を見学して感じた事はどこも組織化されていて、人手も多いということだったが、ここでも未熟児など一対一(三交代を考えると一対三になる)で看護婦が管理していた。今の日本の設備では未熟児など預る事は不可能だと団員の皆さんが言っておられた。
ニューヨークでは AMERICAN BRANDS INS. に TETZEL 博士を訪ねて家族計画の話聞いた。金の大きなベランダを胸にブラブラさせて黒い備

ロンドン大学の PRESBYTERIAN HOSPITAL に VAN DE VIELE 教授及び FRICK 教授を訪ね敬意を表した。ボストンでは先ずハーバート大学の LYING-IN HOSPITAL を訪ねた。GOLDSTEIN 教授はニューヨークへ行って留守のため RAPIN 博士が案内してくれた。この病院は産科が歴史も古く有名であるようだ。お産は年に五七〇〇。医師は専属七人と利用する開業医七〇人であるという。

次に研究部門 LABORATORY OF HUMAN REPRODUCTION AND REPRODUCTIVE BIOLOGY を訪ねた。こゝも GREER 教授が留守で次長の吉永博士に会見。吉永博士は東大農科出で早くから渡米され卵の着床の研究をしておられる。異なった期の二個の卵の着床に(二週と四週というように)成功されたそうである。ここにも日本人の研究者の多いが目立っていた。

午後より Tufts 大学のニューイングランド病院メデイカルセンターを訪れた。この CYSTOGYNETIC LABORATORY では染色体と組織培養をやっていた。IRENE IRWIN という女医さんが染色体の BANDING TECHNIQUE というのをやっていた。染色方法により染色体の縞を進えて出すのだそうで、縞の間に遺伝があるというので遺伝の研究に重要なものの由。

この病院は癌患者が断然多く(一年二〇〇例、死亡率二五%)大体の治療方針は子宮体部癌など NO RADICAL の手術をやってラヂウム照射(六週で三一四〇〇r)をやり好成绩を取

ているという。

シカゴではシカゴ大学の LYING-IN HOSPITAL に YUSPAN 教授を訪ねた。スタッフの崔(二世・中共)、金(韓)揚・蔡(台湾)さん達が代り合つて案内してくれた。金さんは「私のお父さんお母さん学校の先生してました」と言うだけあって日本語も上手。日本語で説明してくれるので助かる。YUSPAN 教授は妊娠中毒症、特に高血圧のその研究で有名な学者で、この産婦人科はアメリカの名門中の名門。アメリカの産婦人科医はこの大学か、JOHNS HOPKINS の席をねらうのだそうである。アメリカには産婦人科の女医さんが少ないと聞いていたが、この大学では多く見かけた。

(以下次号)

理事会議事録

日時 昭和四十九年六月二十二日

(土) 午後二時〜三時

場所 至誠会館四階会議室

出席者(敬称略)

- 三神、小俣、山崎、上田、大原、小野、久保田、佐野、中川、福永、丸山、守安、柳瀬、石田、川島、佐藤、竹内、中西、長池、野中、藤井、森、山本、湯本、八木、佐藤、田、戸田
- 欠席者(敬称略)
- 川那部、稲葉、熊谷、白橋、福島
- 真鍋、森川、山口
- 1 庶務報告
- 2 庶務報告
- 3 庶務報告
- 4 庶務報告
- 5 庶務報告
- 6 庶務報告
- 7 庶務報告
- 8 庶務報告
- 9 庶務報告
- 10 庶務報告
- 11 庶務報告
- 12 庶務報告
- 13 庶務報告
- 14 庶務報告
- 15 庶務報告
- 16 庶務報告
- 17 庶務報告
- 18 庶務報告
- 19 庶務報告
- 20 庶務報告
- 21 庶務報告
- 22 庶務報告
- 23 庶務報告
- 24 庶務報告
- 25 庶務報告
- 26 庶務報告
- 27 庶務報告
- 28 庶務報告
- 29 庶務報告
- 30 庶務報告
- 31 庶務報告
- 32 庶務報告
- 33 庶務報告
- 34 庶務報告
- 35 庶務報告
- 36 庶務報告
- 37 庶務報告
- 38 庶務報告
- 39 庶務報告
- 40 庶務報告
- 41 庶務報告
- 42 庶務報告
- 43 庶務報告
- 44 庶務報告
- 45 庶務報告
- 46 庶務報告
- 47 庶務報告
- 48 庶務報告
- 49 庶務報告
- 50 庶務報告
- 51 庶務報告
- 52 庶務報告
- 53 庶務報告
- 54 庶務報告
- 55 庶務報告
- 56 庶務報告
- 57 庶務報告
- 58 庶務報告
- 59 庶務報告
- 60 庶務報告
- 61 庶務報告
- 62 庶務報告
- 63 庶務報告
- 64 庶務報告
- 65 庶務報告
- 66 庶務報告
- 67 庶務報告
- 68 庶務報告
- 69 庶務報告
- 70 庶務報告
- 71 庶務報告
- 72 庶務報告
- 73 庶務報告
- 74 庶務報告
- 75 庶務報告
- 76 庶務報告
- 77 庶務報告
- 78 庶務報告
- 79 庶務報告
- 80 庶務報告
- 81 庶務報告
- 82 庶務報告
- 83 庶務報告
- 84 庶務報告
- 85 庶務報告
- 86 庶務報告
- 87 庶務報告
- 88 庶務報告
- 89 庶務報告
- 90 庶務報告
- 91 庶務報告
- 92 庶務報告
- 93 庶務報告
- 94 庶務報告
- 95 庶務報告
- 96 庶務報告
- 97 庶務報告
- 98 庶務報告
- 99 庶務報告
- 100 庶務報告

塚(富美)神奈川)清水 貞子(神奈川)江原 愛子(杉並)永瀬喜代子(杉並)樺島 政尾(杉並)

○地震見舞(南伊豆地区)

土屋よの(加茂郡下田町)

河井芳枝(〃)

渡辺嘉子(加茂郡南伊豆)

右三名に見舞金各三千元を送る。

○哲翁たまよ先生胸像除幕式、委員会へ祝電をうつ。

○病氣見舞 真鍋昌子理事：白内障手術入院中生花をおくる。

○吉岡弥生賞基金(東京女子医大老千万円校債・吉岡弥生賞名義荒川あや先生より四九・五・二五郵送される。

○N・B・K(社団法人日本文化協会)光のプレゼント運動への協賛を依頼される。

○浴風会(老人ホーム)より寄付の依頼あり。

○前進座十二月公演観劇の依頼。

○所得補償保険加入の勧誘あり。

○国際女医学会五十年会員の表彰についてのアンケート。

○第十九回日本女医学会総会記事北国新聞に掲載(米林梅子先生より)

○慈恵医大より僻地診療に対する助成金の申請あり。

2 会計報告

四、五月会計報告 守安常任理事

国際女医学会ファンド会計報告

3 議事

(1)第二十回日本女医学会総会期II昭和五十年五月十七日(第三土曜日)

(2)荒川あや先生より吉岡弥生賞名義東京女子医大老千万円校債送付の件について

感謝状を贈呈し、謝意を表する。

荒川あや先生名譽会員辞退について話し合う。

(3)ルーペンダン値上げの件 保留

会計および事業部で再検討する。

従来通りの価格でサマーセールを行う(七月一日〜八月三十一日)

(4)ルーペンダン特許権の件

佐藤千代子理事：小出つる子姉に交渉の結果、実用新案公報に記載されている通りで、現在考案者、出願人は三神会長になっているので従来通りでよいとのこと。

(5)前進座観劇の件

次回に再提出し検討する。

(6)所得補償保険の件 否決

(7)沖繩海洋博医療協力の件 次回会誌に掲載。

(8)事務員夏期ボーナスの件

(9)慈恵医大僻地診療助成の件 否決

(10)会費長期未納者の会費徴収の件

(11)その他

国際女医学会に関する件

ブルジル総会について

出席者数の報告

理事、評議員選出、その他

JCSとの契約十二月七日調印される。

会員の皆様!!

国際女医学会第十五回国際会議成功のため、一丸となって頑張りました!!

会費未納の方

なるべく早くご送金下さい。

編集後記

お待たせいたしました。リオ会議特集号がようやく刷り上りました。投稿者各位のご協力で読みごたえのあるものになりました。

リオにご出席の方のみならず、四百六十の全会員の方々に会議のふんい気を感じとって頂けると幸いです。この会の教訓が東京会議に活かされるよう残された二年足らずの年月を、「和」の精神で一丸となって頑張らしましょう。

リオで社役員が私にささやいて曰く
Everybody wants to be a Queen
Everybody wants to be a Princess
なるほど、こういうことではいけません。日本の諺に曰く
「船頭多くして舟山へのぼる」
こんな事にならないようみなさまのご協力を心からお願ひ申し上げます。

(KOH)

昭和四十九年十二月十日印刷
昭和四十九年十二月十五日発行
編集人 大原 一 枝
発行人 日本女医学会
発行所 東京都新宿区市ヶ谷河田町19
社団法人 日本女医学会
TEL(31)〇九六八
印刷所 東京都港区白金五丁目一
興栄美術印刷株式会社